

第2章

“日本版二十四節気”なるもの

第2章では「“日本版二十四節気”なるもの」を世に問いかけながら検討を重ねた平成23年2月から平成24年2月までの記録をまとめています。

- ◇「暦の上では」というフレーズを天気予報の解説で使い続けてよいのでしょうか？
- ◇「季節の暦」は「二十四節気」のままでよいのでしょうか？
- ◇季節の暦になる“季節のことば”を新たに選んでみたらどうでしょう？
例えば、「“日本版二十四節気”なるもの」を。

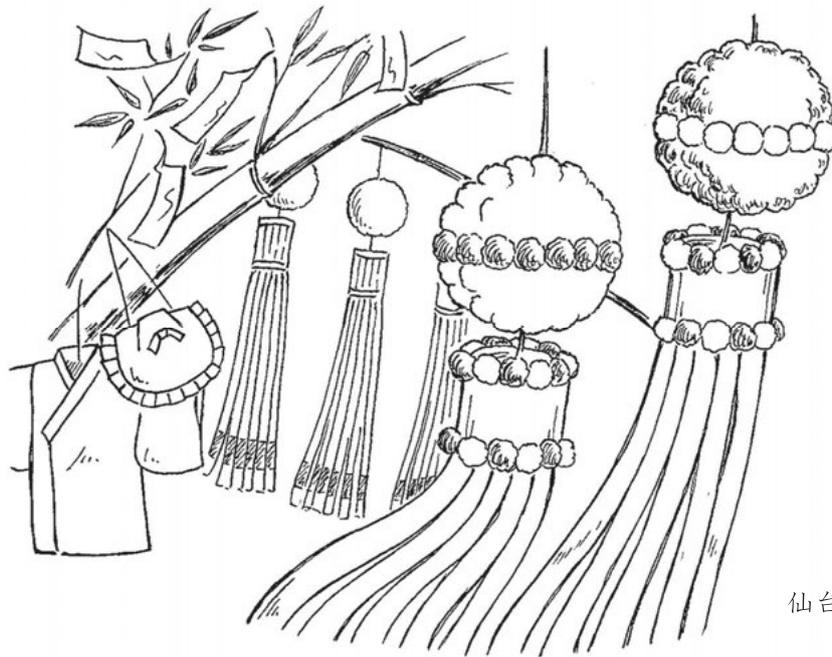
(1) 旧暦と二十四節気

1年のはじまりの1月は冬なのに、季節のめぐりをあらわす「春夏秋冬」は春から始まるのが不思議に感じられたら・・・、七夕まつりが7月と8月にあ
ることを不思議に思ったら・・・、明治のはじめまで使われていた旧暦と二十四
節気について知るとその謎が解けます。

現在、私たちが生活のよりどころにしている暦は「太陽暦」（グレゴリオ暦）
です。1年は365日、4年に1度の閏年は366日で夏のオリンピックが開催され
ます。東京で2度目のオリンピック開催は2020年になります。

そして、1年は12ヶ月（1月～12月）の区切りで、気象学的な区分としては、
春は3月・4月・5月、夏は6月・7月・8月、秋は9月・10月・11月、冬は12
月・1月・2月として季節がめぐってきます。

太陽暦が明治6（1873）年に採用されるまでの長い間、日本では旧暦と二十四
節気を利用した生活をしてきました。古くから続く習慣や行事などは旧暦をも
とに行われているものも残っています。8月に行われる仙台の七夕まつりや東北
の夏祭りなどがその代表例です。



仙台七夕

旧暦は太陽太陰暦です。月の満ち欠けを利用して「新月の日」を毎月1日とするのが太陰暦ですが、太陰暦の1年(12ヶ月)は、太陽暦の1年の日数より11日ほど少ない354日です。このため、旧暦では二十四節気を利用して約3年に1度^{うるうづき}閏月(おまけの1ヶ月)を入れて太陽暦とのズレを修正しています。閏月を入れても旧暦は太陽暦(季節の暦)とはズレがあるので、当時の人々は日付については旧暦をみて、季節に関わることは二十四節気を利用して生活していました。



【旧暦の夢】閏月のある年には13回の給料日！

二十四節気は太陽暦の1年を二十四等分したもので、立春(二月上旬)から始まり、大寒(1月下旬)で終わります。この季節のめぐりの順番が“春夏秋冬”なのです。

このように、行事や普段使っていることばなど、現代の私たちの季節感にも旧暦と二十四節気が影響しています。

【参考】^{にじゅうしせっき}二十四節気

^{せっき}節気 [または節]

(1番目、3番目、5番目…と奇数番目のグループ)

立春(りっしゅん)	2月4日頃
啓蟄(けいちつ)	3月6日頃
清明(せいめい)	4月5日頃
立夏(りっか)	5月5日頃
芒種(ぼうしゅ)	6月6日頃
小暑(しょうしょ)	7月7日頃
立秋(りっしゅう)	8月7日頃
白露(はくろ)	9月8日頃
寒露(かんろ)	10月8日頃
立冬(りっとう)	11月7日頃
大雪(たいせつ)	12月7日頃
小寒(しょうかん)	1月5日頃

^{ちゅうき}中気 [または中]

(2番目、4番目、6番目…と偶数番目のグループ)

雨水(うすい)	2月19日頃
春分(しゅんぶん)	3月21日頃
穀雨(こくう)	4月20日頃
小満(しょうまん)	5月21日頃
夏至(げし)	6月21日頃
大暑(たいしょ)	7月23日頃
処暑(しょしょ)	8月23日頃
秋分(しゅうぶん)	9月23日頃
霜降(そうこう)	10月23日頃
小雪(しょうせつ)	11月22日頃
冬至(とうじ)	12月22日頃
大寒(だいかん)	1月20日頃

注：日付は平成26年(2014年) 国立天文台による。

二十四節気のうち、“光の季節の暦”としての代表的な区切りである二至二分は、昼夜の長さの違いから季節を実感できる代表的な“季節のことば”です。

◆ にしにぶん 二至二分

しゅんぶん 春分(春のなかば): 昼夜の長さが同じくらい

げし 夏至(昼がいちばん長いころ)

しゅうぶん 秋分(秋のなかば): 昼夜の長さが同じくらい

とうじ 冬至(昼がいちばん短いころ)

注:()は「二十四節気ひとこと解説」

二至二分の中間となる**立春**(冬至と春分の間)、**立夏**(春分と夏至の間)、**立秋**(夏至と秋分の間)、**立冬**(秋分と冬至の間)の4つは、“季節のはじまり”そのままのネーミングで二十四節気の中でも親しみやすい節気です。

しかし、立春・立夏・立秋・立冬は、体感する気温と比較されることが多く、「暦の上では」のフレーズと一緒に登場しては「季節とズレている」と言われる節気でもあります。



八節(二至二分と四立)のイメージ

(2) 新しい季節の暦への思い

「暦の上では」天気予報で解説を行う私たちはこのことばにとっても敏感です。

“暦の上”の暦とは“季節の暦”でもある二十四節気のことです。

天気予報の解説では、“季節の暦”と比べながら「暑いです」「寒いです」などと解説することがよくあります。

例えば、2月はじめの
「立春^{りっしゅん}」（二十四節気
の1年のはじまり）を使
って、「明日は暦の上で
は春ですが、全国的に厳
しい寒さが続き北日本
は日本海側を中心に大
雪となりそうです。」と
いうふうに解説します。



北国の立春（イメージ）

同じように、「暦の上では秋ですが（立秋）、今週は猛暑日や真夏日が続くでしょう。」とも表現します。

ここで、猛暑日（最高気温35度以上の日）や真夏日（最高気温30度以上の日）となる予報をお知らせするのに「暦の上では秋」というフレーズは必要なのでしょうか？ 日頃から天気予報を身近に感じてもらうために必要という見方もありますが、シンプルに情報提供のみでいいという意見もあります。



立秋(8月8日頃)のイメージ

暑さのピークは立秋のあとになることが多いですが、この日から暦の上では秋です。昨日までの「暑中見舞い」は、「残暑見舞い」に。

そもそも「暦の上では」のフレーズで利用してきた「二十四節気」が日本の気候に合わないのではないかという声も出ていました。また、「小満」や「芒種」など読みや意味がわからないという人も多くいました。

そこで、平成23年2月に、気象情報を伝える仕事にたずさわる立場から、「いま一度“暦の上では”のフレーズについて考えよう」、「“新しい季節の暦”や“新しい季節のことば”を日本語で考えよう」と始まった企画が「“日本版二十四節気”なるもの」の提案です。この企画は、かたちをかえて「季節のことば36選」の選定と「二十四節気ひとこと解説」の作成につながります。

現代の季節感をあらわす「季節のことば36選」の選定と短い説明で二十四節気に親しめる「二十四節気ひとこと解説」の作成の過程は「第3章“あなたが感じる季節のことば”」に詳しく記載されています。

“新しい季節のことば”のキャッチフレーズは

“日本版二十四節気”

企画書「日本版二十四節気を作成する」(新しい日本の文化の創造)(平成23年2月)より抜粋

<参考>「暦の上では」のフレーズについての意見

◆インターネットの気象情報では二十四節気はあまり使われていない。	◆天気予報の解説で、現代の季節感に合わないまま「暦の上では」を連発したら、逆にわかりにくい解説になるのではないか？ 天気予報の解説を聞いた人が“暦の上とのズレ”の方に強い印象をもっていたら、肝心の予報内容がちゃんと伝わらないのでは？
◆聞いたらすぐに季節をイメージできることばがあった方が、より早く正確に伝えられる。	
◆一般公募で集めたら“新しい季節のことば”ができそう。	
◆二十四節気の知名度を上げるためにできることはないか。	◆現代日本人の季節感に合わない。

(3) “日本版二十四節気”への反論

平成23年12月8日、以下の専門委員で構成される“日本版二十四節気 専門委員会”（以下、本文中では「第1回専門委員会」と呼ぶ）が開催されました。

専門委員会メンバー

委員長 新田尚氏 (元気象庁長官)
 委員 安達功氏 (時事通信社編集局長)
 石井和子氏 (元TBSアナウンサー、日本気象予報士会顧問)
 岡田芳朗氏 (暦の会会長)
 梶原しげる氏 (フリーアナウンサー、専攻:応用心理学)
 片山真人氏 (国立天文台暦計算室長)
 長谷川権氏 (俳人、朝日俳壇選者、きごさい代表)
 山口仲美氏 (明治大学国際日本学部教授)

事務局では事前に「二十四節気の認知度調査」や「日本の気候と二十四節気とのズレについて」を調査し結果を公開していました（巻末資料6【プレス発表資料】①2011年2月22日 日本版二十四節気～日本気象協会は新しい季節のこぼれに取り組みます～参照）。

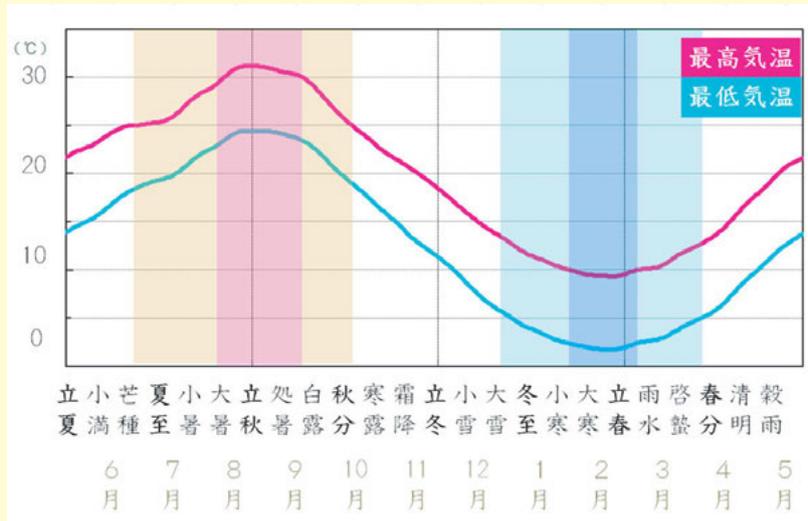


図 東京の日別平年値（気温）と二十四節気（太字は八節）との比較

◆東京の日別平年値(気温)と八節との比較

立秋は盛夏、立春は酷寒の時期に迎えるため、その時分の季節感と一致しません。気温の変曲点にあたるため、次の季節への節目という意味では適切です。

◆東京の日別平年値(気温)と二十四節気との比較

寒暖を表す節気は、比較的気温の推移(東京)と一致しています。処暑に入る頃は、まだ暑さのピークを脱していません。

この資料は、「“日本版二十四節気”なるもの」を企画した根拠でもあります。
なお、専門委員会開催にあたっては、以下の内容についてヒアリングを行いました。

専門委員へのヒアリング内容とその回答より

【1】日本気象協会の取り組みについて

- ・話題提供としては良い。
- ・暦や二十四節気への関心を高めるために有意義な試み。
- ・季節感が薄れてきているのでその面からも面白い。
- ・二十四節気を変えたら問題が生じる(変えてはいけない)。

【2】二十四節気の認知度調査について

- ・12ヶ月で“二十四”は現代人からすると多すぎるのかも知れない。
- ・思った以上に認知度が低い。特に若い世代の認知度が低い。
- ・二十四節気は知らなくても春分や秋分などよく知られている節気もある。

【3】日本の気候(近年)と二十四節気とのズレについて

- ・二十四節気の名称を変更しても日本の気候を二十四区分に当てはめるのは不可能。

【4】新しい二十四節気について

- 案1. 二十四節気のうち一部を公募の対象とし、その頃の季節にあった優しい言葉で言い換える。
- 案2. 二十四節気のすべてを公募の対象とし、その頃の季節にあった優しい言葉で言い換える。
- ・案1・案2ともに反対。
- ・案2でよい。
- ・南北に細長く、多様な日本の気候を統一的に表すことは難しく、“日本版”というくりには無理がある。

【5】一般公募の実施要領作成のためのヒントについて

- ・公募は安易である。
- ・“あなたは何を見て季節を感じますか？ ○○月には何を思い浮かべますか？”というアイデアコンテストでよい。
- ・とっておきの季節のことはをカレンダーにしてつづっては？
- ・全国的に共通なイメージでなくとも、何かしら共感できるものや、意外なもの、地域の特性、世代差・性別などを反映したものなどが出ると面白い。

「専門委員へのヒアリング結果」に「二十四節気の認知度調査と気象統計資料」及び「暦や旧暦に関する解説資料」を加えて、検討資料として専門委員会へ提出されました。

第1回専門委員会では、検討資料等をもとに「旧暦と新暦の違い」や「文学的な季節感」などについて各委員から見解が出され、それらを踏まえた上で“日本版二十四節気”についての検討を行いました。

その結果、「**“新しい季節のことば”**として**“日本版二十四節気”**というキャッチフレーズは**使わない。**」と方針が変わっていきました。専門委員の見解については、次節（シンポジウム「風薫るひととき」）でも紹介されています。

以下に第1回専門委員会での議論で取り上げられた“日本版二十四節気”への反論や検討内容をQ&A形式でまとめました。

第1回専門委員会での質疑応答より

Q1(専門委員) **二十四節気を変えるのですか？また、二十四節気の時期をずらすことは考えていますか？**

A(日本気象協会) 二十四節気も時期も変えるつもりはありません。このようなことばはどうだろうかと提案したいと考えています。

Q2(専門委員) **“新しい季節のことば”に二十四節気から選んだことばを入れてもいいでしょうか？**

A(専門委員) 季節や使用上の問題ではなく、文学、美術すべてにかかわるので、二十四節気はそのまま大事にしたいです。

Q3(専門委員) **二十四節気の中で知名度の低いものについての考えは？二十四節気はすべて知らなくてはいけないものですか？**

A(専門委員) 江戸時代には間接的な表現(雑節や絵ごよみ)で二十四節気を利用している。

明治以降は二十四節気にとらわれすぎ。テレビやラジオでは取り上げなくてはいけないという風潮があったのでは。違う言葉が生活上あってもよいのでは。

Q4(専門委員) **どのような言葉が“新しい季節のことば”にふさわしいでしょうか？**

A(専門委員) 行事、和語などをとりこんだ現代の人たちの季節感をあらわす言葉をまとめたカレンダー的なものを考えてみたいです。

(専門委員コメント)

二十四節気は季節を光で感じる一面があり、今の人々は温度で感じている。現代の人たちはどんな季節感を持っているのだろうか。今の人々の季節感を大きく取り上げて(企画が)盛り上げてほしい。

暦は長い流れがあった。のちのちの人が、二十一世紀の人がこんな感覚をもっていたと読み取れるものがあたらいい。暦の中で「今」の時点をとらえた季節のことば(その時代を反映した)ものがあってもよい。



(注)一般の方からも「二十四節気を変えるのはやめてほしい」という意見が日本気象協会によせられました。

(4) シンポジウム「季節が薫るひととき」開催

「“日本版二十四節気”なるもの」への専門委員の先生方や一般の方からの反論を踏まえながら、新しい季節のことば（のちの「あなたが感じる季節のことば」）募集へつながる公開討論会が開催されました。それがシンポジウム「季節が薫るひととき」（第3回日本気象協会メセナ 平成23年2月10日(金)開催）です。

内容は、暦のあれやこれやを専門の先生方と楽しく学んで「季節が薫るひととき」と題して季節のことばを考えてみようというものです。

ここでは、簡単にシンポジウムの開催内容を紹介します。

シンポジウム「季節が薫るひととき」主な内容

◎主催者ごあいさつ

一般財団法人 日本気象協会理事長 小林堅吾

◎ディスカッション

出演

コーディネーター: 梶原しげる

パネリスト: 岡田芳朗 長谷川 前田修平

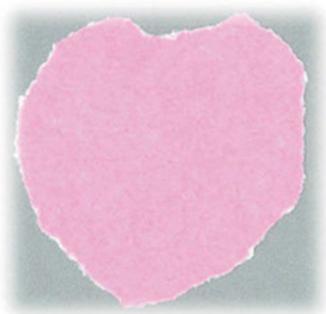
内容

- ・二十四節気と旧暦について
- ・新しい季節の言葉について
- ・来場者からの質問にお答えして
- ・新しく選ぶ季節のことばに関する考察



(主催者あいさつより)

“新しい季節のことば”の募集要項を決めて広く世間に募集したいと考えているところです。このセミナーでは、「そもそも二十四節気とは何なのか?」、「日本の気候の特徴とは何なのか」、「日本人の季節感がどうなるか」について専門の先生方のお話を聞いて、募集要項を作成するために必要な共通認識などについて考えたいと思います。



(ディスカッションより)

「二十四節気」という発想は中国で起きたもので中国の北の方の気候にはかなり合っている、それより暖かい日本では少し合わないのは当たり前です。

「海洋性気候の日本」では寒さや暑さのピークが大陸とはズレています。

「二十四節気」は伝統的なものです。妙にいじらない方がいい。それなりに価値があります。

「ちょっとズレているところで独自の文化を作っていく」これが繊細な日本人の季節感の基本です。この季節感をもとにあらゆる日本の文化が成り立っているのです。

キャスターが使える「素敵なことば」、季節にぴったりで「今だなあという言葉」が欲しいです。

「和風月名」のような発想で親しみやすい言葉があってもいいです。

24個でも35個でもわかりやすい言葉をつなげて、それぞれの季節にふさわしい言葉でまとめられるといいと思います。

大胆に考えればよくて、「クリスマス」や「バレンタインデー」も入れてもいいと思います。

シンポジウム「季節が薫るひととき」

開催日時：2012年2月10日（金） 13:00 開場 13:30 開演

開催場所：メトロポリタンプラザビル 12F

池袋ステーションコンファレンス Room2

入場料：無料

申込み：事前申し込制（定員90名）

来場者数：一般77名（男性58名、女性19名）

報道関係5名（日本経済新聞社、世界日報社）

インターネットにて動画配信のアクセス数：

常時閲覧者数（平均）65名 当日累積閲覧者212名

※開催内容の詳細は、巻末資料2に記載されています。